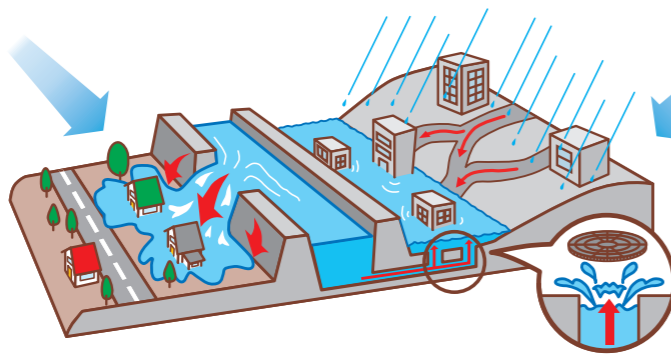


洪水・浸水害について

氾濫の種類

雨量の増加によってもたらされる氾濫には、川から水があふれたり堤防が決壊して起こる「外水氾濫」と、街中の排水が間に合わず、地下水路などからあふれ出す「内水氾濫」の2タイプがあります。

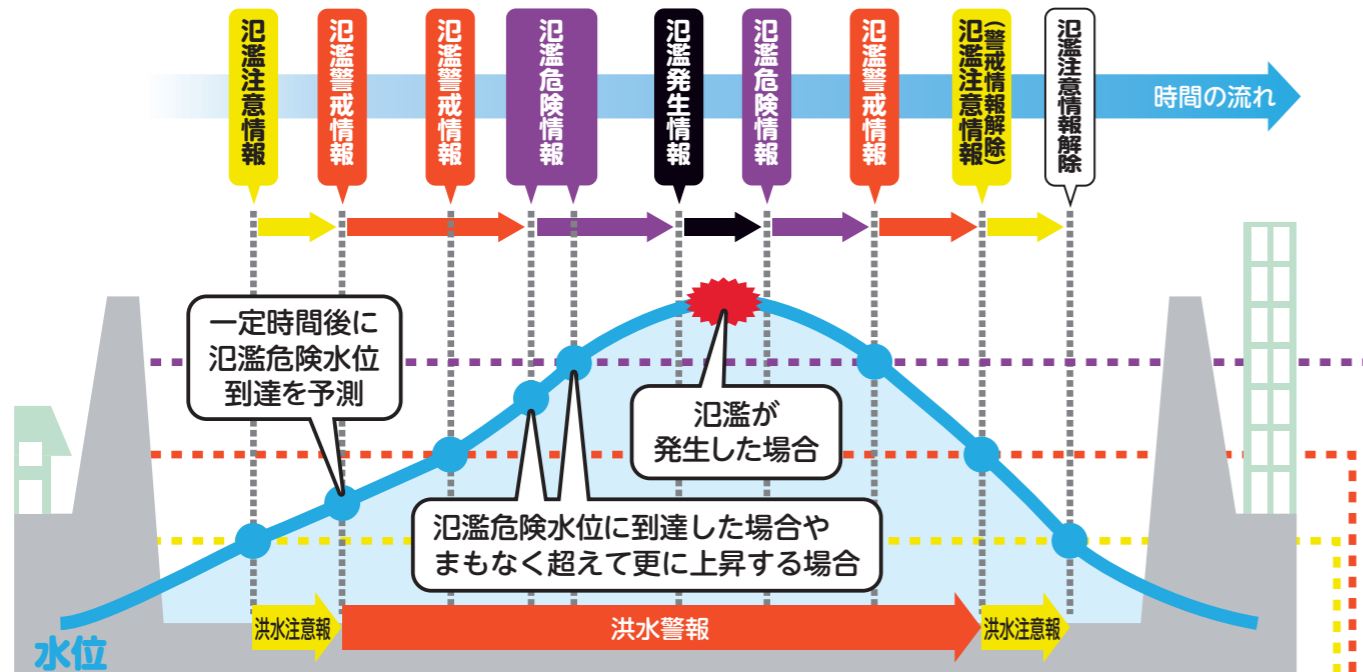
外水氾濫
大雨の水が川に集まり、川の水かさが増し堤防を超える、あるいは堤防を決壊させて川の水が外にあふれて起きる洪水。氾濫が起きると一気に水かさが増すため、最大の注意が必要。



内水氾濫
その場所に降った雨水や、周りから流れ込んできた水がはけきれず溜まって起きる洪水。的確なタイミングで警報や避難指示を出すのが難しいため、注意が必要。

河川の危険水位と洪水予報

河川ごとに設定された以下の危険水位に応じ、河川管理者と気象庁から洪水予報が発表されます。自治体はこの情報を目安にして、避難に関する情報を発令します。



河川名	遊楽部川	落部川	野田追川	見市川
氾濫危険水位 (レベル4水位)	4.47m (上流:17.76m)	5.24m	7.23m	4.22m
避難判断水位 (レベル3水位)	4.11m	4.40m	—	—
氾濫注意水位 (レベル2水位)	3.29m (上流:16.88m)	4.09m	6.47m	3.63m

(ページ内の図表は気象庁ホームページより抜粋、編集)

避難行動のポイント、危険な場所

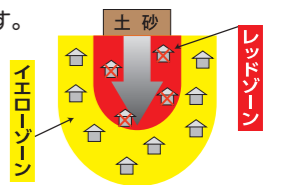
- ！ 浸水が始まる前に早めの避難を**
氾濫水は勢いが強く、大人の膝程度の深さで歩行が困難となる。浸水してから自宅外への避難は危険。気象予報や河川洪水予報などの情報をもとに、身の危険を感じたら自主的に避難を開始する。
- ！ 状況に応じた避難を**
周囲の状況が危険で避難場所まで移動できない場合は、自宅や近隣の頑丈な建物のできるだけ高い階に避難する。移動途中であっても、危険を感じた場合は、近隣の建物のできるだけ高い階に避難する。
- ！ やむなく浸水の中を歩く際は**
裸足、長靴は厳禁。水中で脱げづらい紐靴などが適している。また、氾濫水は濁っているため、水面下が確認できない。長い棒などを杖替わりとし、側溝やマンホール、障害物に注意する。
- ！ 川や用水路に近づかない**
降雨が続く不安に思っても、川や用水路、田畑の用水は見に行かない。やむを得ない場合は複数人で行動する。河川の様子を確認は、自治体などのライブカメラ情報を活用する。また、避難の途中でも増水した川の近くを通るのは避ける。
- ！ 地下室、地下街は危険**
地下にいる場合、地上の様子が把握しづらく、避難経路が限定される。また、地上が冠水すると、一気に水が流れ込んでくる場合もある。停電の可能性も高く、脱出が困難となる。
- ！ アンダーパスは危険**
道路や線路の下をくぐるアンダーパスや地下道は、洪水の際、真っ先に浸水する。場所を把握し、迂回路を想定しておく。

土砂災害について

土砂災害の警戒区域

土砂災害防止法に基づき、都道府県は調査を実施し、土砂災害のおそれのある区域を以下の通り指定しています。

- 土砂災害 特別警戒区域(レッドゾーン)** 建築物に破損が生じ、住民に著しい危害が生じるおそれがある区域
- 土砂災害 警戒区域(イエローゾーン)** 土砂災害のおそれがある区域



土砂災害警戒情報について

土砂災害警戒情報は、警戒レベル4相当情報であり土砂災害がいつ発生してもおかしくない状況となったときに、北海道と気象庁が共同で発表する防災情報です。情報は市町村単位で発表されますが、特に警戒区域周辺にお住まいの方は実際の周囲の状況や雨の降り方にも注意し、この情報が発表されていなくても危険を感じたら、迷わず自主避難を行いましょう。

避難行動のポイント

土砂災害は突発性が高く、甚大な被害をもたらします。警戒区域内においては避難の猶予がほとんどないものと考え、「様子がおかしい」と感じたら、ただちに避難行動をとってください。

- 土砂災害警戒区域内、また指定が無くとも「谷の出口」や「がけの下」からは、いち早く退避する。
- 指定避難所までの移動が困難な際は、近隣の堅牢な建物の高層階へ避難する。
- 外出にも危険が伴う状況で、やむなく自宅に留まる場合は、2階以上のできるだけ山側から離れた部屋に移動する。

